

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

11

2019

「農水産物・食品輸出」シリーズ／後篇

特集 追跡、チャレンジ農業者



特集

「農水産物・食品輸出」シリーズ／後篇

追跡、チャレンジ農業者

3 ナガイモが教える青果物輸出モデル

有塚 利亘

生産過剰による価格暴落を抑えるため開始した十勝産ナガイモの輸出が好調だ。9つのJAが広域連携してロットをまとめて応え、安全・安心の認証を取得し優位に立つ

7 日本酒の価値を訴えて世界市場を獲得

小澤 弘教

政府による日本酒輸出促進へのバックアップ体制が整うが、酒造メーカーによる市場開拓への取り組みも必要だ。地酒輸出の先駆者、福島・会津地方の酒造メーカーから学ぶ

11 市場分析で小玉リンゴに特化して輸出

内藤 祥平

東南アジアの一般消費者に的を絞り、日本産小玉リンゴを輸出。日本の農業の国際展開を支援し、新たなビジネスモデル構築を目指す

情報戦略レポート

15 食品企業の6割超がHACCPに取り組む 景況動向は5半期連続のマイナス

—食品産業動向調査(2019年7月調査)—

経営紹介

経営紹介

23 株式会社ファームランド牧／鹿児島県 牧 信一郎

熱水を使った土壌消毒法によりメロンの連作障害を克服し、品質と価格でグレードを区分することで全量売り切る体制を構築する。売り上げの2割が輸出であることも特徴だ

変革は人にあり

27 株式会社やまがたさくらんぼファーム／山形県 矢萩 美智

温室栽培など取り入れ収穫期間を伸ばし、くつろげるカフェを設ける。一方、従業員の働きやすい環境を整備し、お客と従業員のどちらにも「満足度日本一」の観光農園をめざす

12月号予告

特集は、「ヨソモノ・ワカモノが導く農山村振興」を予定。
農山村は、労働力不足、鳥獣被害など課題山積で対策は待ったなし。
そんな中、若年層を中心としたヨソからの移住者がまちおこしや地域課題の解決に取り組む動きが見られ始めた。ヨソモノ、ワカモノが導く農山村振興、その先の未来について、事例を交えて考察する。



撮影：山梨 勝弘
長野県下伊那郡根羽村
2013年11月29日撮影

晩秋の朝

■山峡の稲田を覆っていた霜が、朝の陽光で解け始めた。水滴は光の反射を受け、稲田を宝石のようにきらめかす■

シリーズ・その他

観天望気

食料需給構造のパラダイム転換

盛田 清秀 2

農と食の邂逅

佐藤 智香/熊本県

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

あお納豆よ 中井 貴恵 22

主張・多論百出

民俗学者 野口 憲一 25

耳よりな話 211回

獣医学教育の礎・私学編②

加茂 幹男 30

まちづくりむらづくり

小学校存続へ、子育て世代の住宅

子どもの姿が自治活動に弾み

青河自治振興会／広島県三次市

岩崎 積 31

書 評

筒井 一伸・尾原 浩子 著 関司 直也 監修

『移住者による継業 農山村をつなぐパトシリレー』

青木 宏高 34

資金紹介

..... 35

インフォメーション

新規就農者に情報交換や

ネットワーク作りの場を提供 宇都宮支店 36

農業者から学ぶアドバイザーが担うべき役割

甲府支店 36

新規就農者向け講習会で

経営の課題や悩みを共有 名古屋支店 36

デザインから考える売れる農産加工品の作り方

大分支店 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第13回アグリフードEXPO大阪2020 38

観天 望気

食料需給構造のパラダイム転換

二〇一四年の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第5次評価報告書で、地球温暖化が食料生産に負の影響を与えると結論づけられたのは記憶に新しい。さらに今年八月のIPCC第2作業部会の特別報告書『Climate Change and Land』は、気候変動が土地の劣化を引き起こし、食料安全保障に影響するとした。

実際に食料需給は二一世紀になって、二〇世紀とは全く別次元の局面を迎えている。すなわち食料価格が二〇世紀の水準から一段階切り上がり元に戻らない。穀物価格の動向は、豪州での小麦大不作などをきっかけに〇六年ごろから顕著に上昇して史上最高値を記録、〇八年のリーマンショックで世界経済が混乱を極める中で大幅に低下するものの、元の価格に戻らず現在まで高値を維持している。リーマンショック発生時は世界恐慌さえ懸念されたが、一般的にそういうときには食料（穀物）価格は暴落する可能性が高い。それでも高値圏を維持するということは、世界食料需給に構造的変調が生じた証拠といつてよい。

その原因として指摘されるのは次の四つである。

第一に世界人口の増加と人口大国の経済成長による食料需要の増大、第二にバイオ燃料原料としての新規需要の出現、第三に地球温暖化による食料生産への悪影響、第四にファンド等投機資金の流入である。このうち第一の需要増は、二〇世紀に予想され、需給見通しにおおむね織り込み済みである。また第四の投機資金流入は、価格変動幅の拡大をもたらすものの継続的な引き上げ要因、つまり構造的要因と見ることはできない。それ故、バイオ燃料需要の出現と地球温暖化による食料生産への悪影響が二一世紀的要因である。そしてこれは不可逆的な変化である。

これからどうなるかは、非食料バイオマス資源の燃料化技術やシェールオイル、太陽光・風力発電の動向、さらには遺伝子編集など新技術採用の見通しやそれによる生産性への影響などが絡んで見通すことは難しい。確実なのは、食料安全保障は世界レベルでも国レベルでも重要性を増しているということである。



公立小松大学国際文化交流学部教授

盛田 清秀

もりた きよひで

1952年生まれ。東京大学農学部卒。東京大学博士（農学）。前日本農業経済学会会長。農林水産省北海道農業試験場研究室長、日本大学教授、東北大学教授を経て2018年より現職。専門は農業経済学。内閣府規制改革会議専門委員、農林水産省優良経営体表彰審査委員長などを歴任。

特産阿蘇高菜を使い
種をマスタードに商品化
落ち込んでいても
畑の野菜が足元で
元気をくれるんです

農と食
の邂逅

佐藤 智香 さん

熊本県阿蘇市

阿蘇さとう農園代表

大工にあこがれた子ども時代から、デザイナーを志して自動車メーカーで夢を実現。阿蘇が豪雨の被害に遭い、「地元で何かしたい」と強い思いから故郷で就農。農産加工品の阿蘇タカナードが大ブレイク。





P19:笑顔が素敵な智香さん P20:阿蘇タカナードは「2016年度優良ふるさと食品中央コンクール新商品開発部門」で農林水産大臣賞を受賞(右上) 5、6月に収穫した高菜の種は脱穀、洗浄、乾燥という工程を経てようやく加工される(右下右) 祖母の清子さんと(右下左) 約20軒の農家から仕入れた阿蘇高菜の種。右は従業員の園田まどかさん家族(左)

足元の作物に励まされ

子どもの頃は大工に憧れ、やがて工業高校と専門学校で、プロダクトデザインを学んだ佐藤智香さん(三三歳)。卒業後は、自動車メーカーに就職し、クレイモデラーとして働いた。クレイモデラーとは、デザイナーが描いた車のデザインをもとに、法規制などを踏まえ、粘土で実物大の車を造り上げる職人のことだ。

そんな智香さんが、地元の阿蘇市に戻ったのは二〇一二年九月。きっかけは一年の東日本大震災と翌年七月の九州北部豪雨だった。豪雨は阿蘇市をはじめ、熊本県や大分県に大きな爪痕を残した。実家は被害を免れたが、「地元で何かできることはないか」と真剣に考えるようになった。

子どもの頃、「農業は男の仕事」というイメージがあったという。だが、自分なりの農業スタイルを確立している若い女性が出版した本を読み、刺激を受けた。智香さんの就農の決断を聞くと、職場の同僚や家族は目を丸くし、そろって「職場を辞める未練はないのか」と心配した。「未練はなかったです。うまくいかなければ、『農業で失敗』という本でも書きます」と答えたものです。まずは地元に戻ろうという想いが強かった。

祖父母が自給的な農業を営んでいたが、智香さんは経営として農業を始めた。半年間はバイトをしながら情報収集に努め、少量多品目の野菜を有機栽培する農家の元で一年間

研修を受け、一四年四月に就農。各種野菜を作り、一部はピクルスに加工し、道の駅に出荷した。そのような中で、智香さんがのめり込んだ作物が、祖母の清子さん(八九歳)から教わりながら作り始めた阿蘇高菜だった。

阿蘇地方だけで生産される阿蘇高菜。他の場所で作付けすると、違う形状になってしまふそう。秋に種をまき、時に氷点下を下回る寒い冬に力を蓄え、適度な辛みのおいしい高菜に仕上がる。三月、柔らかな新芽だけを収穫し、大半の農家が地元に一〇軒ほどある漬物業者に納める。収穫適期はわずか三日。どれだけ頑張っても夫婦二人でこなせる面積はせいぜい一〇ア。加工原料故、農家の手取りは多くはなく、一〇アで四万円程度。主力の作物にするには収入が少なすぎる。他のやり方はないのかと、智香さんの模索が始まった。

少量多品目の生産体制も見直す必要があった。「事業計画も立てず、売り先も確定しないままあれこれ作って、道の駅に出したり、マルシェで売ったりと、今思えば無謀でした。農業をやめたいと思うこともありましたが。そんな智香さんを励ましたのは、相談に乗ってくれた人々や農家の仲間、そして大地だった。「落ち込んでいても畑に立つと、足元の野菜が元気をくれました」

阿蘇タカナードが完成

実は、阿蘇高菜の活用法として、温めていたアイデアがあった。種を採ってマスタード

を作ることだ。誰もやっていなかったが、カラシ菜からマスタードを作るテレビ番組を見てひらめいた。「阿蘇高菜もカラシ菜の一種。できるはず」ところが周りは「農村では売れないよ」「挑戦はあまりしない方がいい」と冷やかだった。

六次産業化に関するセミナーに参加し、



噴煙を上げる阿蘇の山並みを背景に。智香さんは阿蘇を訪れる人に、雄大な自然と人々の営みを説明する「ジオガイド」の資格も持っている

「今こそ実践の時」と思い、その足で、地元のソーセージ工場の店主を訪ねた。あらかじめ販路を探っておくことは、就農当初の反省を踏まえたもの。意外にも店主の反応は良く「作ってみてよ」と言ってくれた。試作品への評価も高く、トントン拍子で話が進んだ。ラベルや瓶は店主の方で準備をしてくれた。阿

蘇高菜から生まれたマスタード、ならぬ「阿蘇タカナード」。道の駅などに置いてもらうと、四カ月で九〇〇個が売れた。

しかし、そこで満足する智香さんではなかった。加工時に生じる味のバラツキを何とかしたかった。「ネットで探したレシピを見て作り始めましたが、本質的なポイントをつかんでいなかった」と言う。「種の中にある酵素がポイント。これが辛み成分を引き出してくれる。酵素が働きやすいように加工過程で温度管理をすること、種のすりつぶし方を工夫することが決め手だと分かったんです」

阿蘇高菜の生産や種採りの方法も改善した。最初は全工程がほぼ手作業で、なかなか生産性が上がらなかった。そこで、収穫はバインダーを使うことにした。小さい種が落ちないよう、青みが残る段階で刈る。最終的な選別には、茶葉用の選別機を導入し、小さな不純物まで取り除けるようにした。栽培面積は一〇㍓から六〇㍓へ増えたが、なお種が足らず、多めに自家採種している農家から融通してもらった。今では農家から買い取る種の方が多いぐらいだという。阿蘇タカナードはさまざまな賞にも輝き、年間一万个が売れるヒット商品になった。

阿蘇の農業を知ってほしい

販路はほぼ熊本県内だが、東京などに売り出すよりも「もっと県内に伝えていきたい」と智香さんは話す。大量生産するつもりもない。「タカナードを売るために農業をや

っているわけではないから」ときっぱり言い、こう続けた。「阿蘇という地域と、その中で営まれる農業があることを伝えたいし、応援してもらいたい」

阿蘇といえば壮大な草原が有名だ。定期的に野焼きすることで、人畜に有害な虫などが駆除され、牛や馬の良質な餌場となる。この家畜から出される堆肥は、平坦なカルデラで営まれる稲作や畑作に使われる。独自の循環農業が営まれる阿蘇の自然は観光資源でもあり、多くの人が訪れる。きれいな水があるので工場もあり、雇用を生んでいる。

ここに阿蘇高菜をどう位置付け、組み合わせるか。すでに智香さんには構想がある。菜の花を咲かせれば、それ自体が観光資源となる。蜂が来れば蜂蜜が採れる。種もタカナードにするだけでなく油を採れば、廃油などと混ぜてバイオディーゼル燃料として、農業機械を動かすことができる。「阿蘇高菜の栽培面積を減らさず、どう活かすかという道を見つけてこそ、私が阿蘇に帰ってきた意味があると思うのです」

すでに、阿蘇高菜を参加者に収穫してもらい、漬物に加工するイベントを開き、二日で約八〇〇人を集めている。「趣味ですか？阿蘇のことを考えることかな。ふふふ」――。智香さんは単に阿蘇高菜を加工する若き女性農業者ではなく、雄大な阿蘇の自然に抱かれ、持続可能な農業を構想するデザイナーであり、ファーマーである。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)



私がアメリカに住んでいた一九八〇年代後半は、まだ日本食が今ほど世界に浸透している時代ではなかった。しかし、今や「寿司」はヘルシーな食事の代名詞のように世界中で食べられるようになり、箸を上手に駆使して「ラーメン」や「丼物」を口に運ぶ外国人も多くなった。

今年の夏、訪れたウイーンのホテルの朝食会場でのこと。泊まったホテルには和食レストランが入っているためか定番のヨーロッパアンスタイル・ビュッフェの片隅にほんの少しだけ日本食コーナーがあった。白いご飯、味噌汁、卵焼き、そしてあまり人目につかない棚の上になんと納豆があった。あの白い四角いケースに入っているおなじみの納豆だ。

しかし、まわりを見渡すとほとんどの人が日本食には手をつけていない。そうだよ、この四角い箱の中身の正体を知る人などここにはそういないはずだ。私は救われる思いで久しぶりにご飯に納豆、そして味噌汁を食べ、旅先での胃袋を落ち着かせた。

すると私のテーブルのすぐ近くに白人の若いカップルがやってきた。彼らを見ていると、迷うことなくこの納豆と白いご飯を持ってきたのである。そして嬉しそうに納豆のパックをあけると、薬味を入れ、からしと付属のたれを入れて器用に箸を使って納豆をかき混ぜ始めた。その混ぜ方がまさに日本人。かなり長い時間かけて納豆を丁寧に混ぜると熱々の白いご飯にそれをのっけて食べ始めた。二人はなんども顔を見合せてニコニコしながら、さも「あーおいしい」と言っているようである。日本に旅行でもして納豆のおいしさを知ったのだろうか。それとも親戚に日本人でもいるのだろうか。さまざまな想像を巡らせた。

ああ納豆よ。ついに君もこんな風に外国人たちの胃袋を満たし始めたのね。この光景を見て、長女と結婚したカナダ人の彼が、刺し身やにぎりのおいしさに目覚めたものの納豆巻きだけはどうしてもダメだと言ったことを思い出した。

わが家の婿になったのだから、納豆のおいしさを理解するまで食べさせ続けようと固く心に誓った私であった。



女優・エッセイスト
中井 貴恵

なかい きえ
1978年「女王蜂」でヒロインデビュー。82年「制覇」で日本アカデミー助演女優賞を受賞。98年より「大人と子供のための読みきかせの会」代表を務め、現在まで1400公演。2009年にスタートした小津安二郎監督映画を朗読する「音語り」シリーズが全国で好評。

ああ納豆よ

民俗学者

野口 憲一



●のぐちけんいち●
一九八一年茨城県生まれ。研究者とレンコン農家の二刀流。株式会社野口農園取締役。日本大学文理学部非常勤講師。日本大学大学院文学研究科社会学専攻修士、博士（社会学）。専門は民俗学、食と農業の社会学。平成二五年度日本農業普及学会奨励賞受賞。

近

年、農業界では「スマート農業」と呼ばれる流行があります。スマート農業の主眼は、ハイテク機械を導入して農業生産を省力化することにより、一人が生産できる農産物の量を増やすことです。しかし、私はこの方向だけを追い求め続けることに反対です。「スマート」という表現の目新しさはあるものの、実際は従来の近代農業の方向性とほとんど変わらないからです。これまでの近代農業とスマート農業の違いは機械のスペックにしかありません。

私は、二〇一九年四月に新潮社から『1本5000円のレンコンがバカ売れする理由』と題する新書を出版しました。この本で主張したのは、「いかにして農業の価値を社会に適正に位置付けるか」ということです。農業を営んでいる方であれば誰しも分るかと思いますが、機械の導入は確かに農作業を楽にしてくれたかもしれませんが、しかしその結果として農業の価値、野菜の価値は何一つ上がりませんでした。

スマート農業と農産物の付加価値を同列に論じる言説もありますが、大量生産と価値は反比例することがほとんどです。機械化によって大量生産された商品が価値を持ち続ける可能性はほとんどありません。それはなぜか。

ハイテク機械の導入を繰り返すことで、「技術の悪循環」と呼ばれる現象が発生するからです。ハイテク機械を導入すれば、農産物が大量生産できるようになり、一時的には利益が上がるかもしれませんが、しかし多くの事業者がこうした機械を導入することで、供給が需要を上回って価格が下がります。各事業者は価格が下がったことで薄くなった利益を数で埋め合わせるために、さらなる大量生産を目指します。そこで、新たに開発されたより高額なハイテク機械を導入した結果、さらに価格が下がって利益も減ってしまいます。

機械の導入による省力化で農作物を大量生産する以外のやり方で利益を確保し、経営を安定させる方

法を考えなければなりません。

そこで私が提案したのは、端的に言って「農産物を高く売る」ことです。機械を導入することで農作物の生産性を向上させるのではなく、農産物の価格を上げることで労働生産性を向上させるのです。具体的には、農産物に高付加価値な「記号」を張り付ける、農産物のラグジュアリー・ブランド化です。

仮

に、高度成長期のような時代であれば話は別ですが、現在の日本はマーケットが先細りを続ける人口減少時代。大量生産の行きつく先は終わりのない価格競争です。さらに、完全に農産物の関税を取り払って輸出に賭ける国づくりを目指すべきだという見解もあります。しかし、日本には中国やオーストラリア、そしてアメリカのような広大な農地があるわけではありません。機械を用いて農産物を大量生産し続けることの限界はすぐにやってくるでしょう。

そして、重要なことがもう一つあります。それは日本の高品質な農作物は、農業者の技能によって支えられてきたということです。機械をはじめとした科学技術は平均的な農作物を生産することには確かに

長けています。しかし、それで従来と同じような高い品質の農作物が栽培できるという考えは誤りです。これまで、日本の農家は、農作物一本一本に向き合うような営みを永く続けてきました。農作物と会話し、その声を聴く身体性を身に付けることにより、その作物に適した栽培を行ってきたのです。だからこそ、日本の農作物は高品質だったのです。その背景を無視し、ハイテク機械を導入すれば高品質な農作物を大量生産できるというのは、あまりに現実離れた見解であると言わざるを得ません。

私はスマート農業自体を全否定しているわけではありません。スマート農業を導入して合理化を図り、省力化した方がよい部門もあるでしょう。しかし、その場合はマーケティングやマーチャンダイジング、営業、そしてブランドマネジメントなどを農家が完全に掌握しておく必要がある。そうでなければ「技術の悪循環」によって農家からの価値の流出が止まらなくなってしまう。

農業の価値の創造を図り、農家が農家としての誇りとやりがいを取り戻す方法を考えていこうではないですか。



農産物のラグジュアリー・ブランド化 機械による大量生産と価値は反比例

獣医学教育の礎・私学編②

畜産関連の碑めぐり (22)

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

加茂 幹男

南 麻布二丁目の古川橋の通りから北に入り込んだ所にある曹溪寺の前に「麻布獣医学園発祥ノ地」の地碑があり、その脇に、歴史を記載した看板が建てられています。

略史には、『学校法人麻布獣医学園麻布大学の前身は、明治二十三年(1890年)九月十日、東京獣医講習所として、帝国大学農科大学助教授與倉東隆によって開設されました。東京市麻布区本村町二〇四(日東山曹溪寺境内)にできた私立慈育小学校の一部を借りて校舎とし、全国から選抜推薦された獣医師に六か月間、解剖、生理、薬物、内科、外科、装蹄、病院実習、装蹄実習を教授しました。

明治二十七年(1894年)一月に麻布獣医学校と改称し、同二十八年(1895年)十月には、與倉東隆がすでに開設していた東京家畜病院がある麻布区新堀町に校舎を新築移転しました。その後、明治四十五年(1912年)三月に、麻布獣医畜産学校、昭和九年(1934年)四月に麻布獣医専門学校、同十九年(1944年)十二月に麻布獣医畜産専門学校と改称しました。

昭和二十年(1945年)五月、戦災により学園諸施設を消失したため、神奈川県相模原市に移転し、同二十五年(1950年)に校名を麻布獣医科大学として開学し、昭和五十五年(1980年)麻布大学と改称し、現在に至



「麻布獣医学園発祥ノ地」の碑

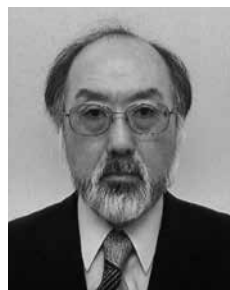
つています。』と記載されています。
麻 布獣医学園の創設者である與倉東隆は、同郷の先輩で内務省勸農局長だった松方正義の切なる薦めで、開成学校法学部経済学科予科から駒場農学校獣医学本科に転校し、農商務省に勤務しました。

その後、米国ニューヨーク州獣医大学に入學し、Doctor of Veterinary Surgeryの称号を得て一八八六年に帰国し、東京農林学校の教授になりました。当時、農商務大臣となり、畜産

と獣医学術の向上に強い関心を寄せていた松方正義の依頼を受け、かねての持論「帝国に於ける畜産農業の狀態たるや未だ以て頓に高尚幽玄なる学理を応用して此を實地に施し其改良發達を促す域に達せず」という状況を憂慮し、「實地に堪能なる士を養成し此を普く全国に及ぼし徐ろに斯業の改善を図るの時機たりし也」という考えもあって、帝国農科大学助教授らの協力と農商務省の支援を受けて、私立慈育小学校内に「東京獣医講習所」を開設しました。

創立以来、幾多の変遷を経て、現在は「獣医」「環境保健」の両学部、そして、二〇〇八年度からは、環境保健学部を改組して新たに設置した「生命・環境科学部」と大学院からなる大学へと発展しています。

F



Profile

かも みきお
1950年北海道生まれ。岩手大学農業機械学科卒業後、農林省東北農業試験場入省。農林水産技術会議事務局、(独)農研機構近畿中国四国農業研究センター四国農業研究監、(独)農研機構畜産草地研究所草地研究監などを経て、2010年から日本政策金融公庫に勤務。専門は畜産草地で、主な研究対象は飼料の収穫・調製・給与など。



小学校存続へ、子育て世代の住宅 子どもの姿が自治活動に弾み

広島県三次市

青河自治振興会 会長 岩崎 積

住民出資で会社設立

中国地方の広島県三次市の中心部南に位置し、自然豊かな山と川に恵まれた風光明媚な農村地帯である青河町は、住民数が四〇〇人余りの小さな町です。

高齢化率四三・八%の町ですが、子どもたちの明るい声が響き渡るようになりました。私たちの取り組みによって、子ども連れで移住する人たちが増え、地域は活気を戻しつつあります。取り組みのきっかけは、地域にある唯一の学校、青河小学校が過疎化、少子化により廃校の危機に立たされたことでした。

合併特例法が改正され、平成の大合併に向けた議論が本格化した二〇〇一年ごろのこと。青河町では、青河小学校の児童数の減少が問題になっていました。一九六〇年ごろには約一五〇人いた小学生が、三〇人を切るまでになっていました。三次市からは「全校児童数が二〇人以下

となった場合、速やかに学校再配置の検討に入る」という方針が示され、近隣の小規模な小学校との統廃合についての説明会が開かれました。

小学校がなくなればもっと子どもの数が減るでしょう。子どもが減るといことは、この地域がなくなることには他ならないと感じました。何としても小学校を守らなくてはならない。減少の一途をたどる児童数に私たちは焦りを感じていました。周囲に声を掛け打開策を考え、青河出身者にUターンの呼び掛けをするなど自分たちでできる限りの取り組みをしていました。しかしなかなか結果に結びつきません。

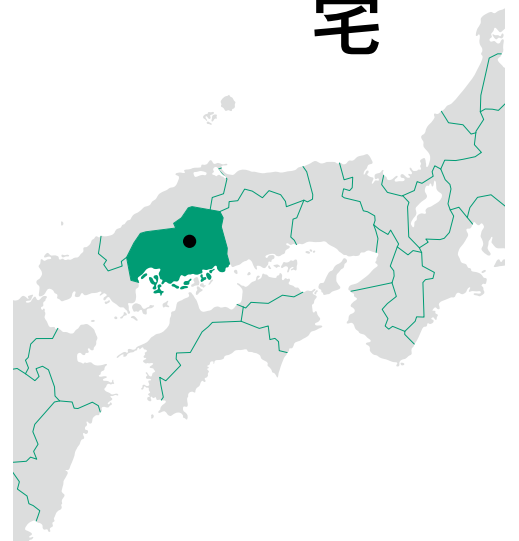
そこで私たちは、地域の価値を高めることで新たな住民を呼び込もうと考え始めました。青河町には駅はありませんが、三次市の中心へは車で一〇分程度の距離です。そこから広島市まではJRで約一時間。通勤も通学もできない距離ではありません。そこで、住みたくするような家を造り、家賃を安く設定すれば若者家族が

きつと移住してきてくれるに違いないと分析しました。

ちょうどその頃、若者による町おこしの機運も出てきました。町内の神社はもとより県内各地の神社からも多くの製作依頼があり奉納してきた「わら細工の匠」である高野司朗さんが中心となって「青河若連」を結成、大しめ縄づくりを始めたり、町内でとれた酒米を使用した地酒造りに取り組んだり、さらには現在まで継続する「ほたる祭り」を始めたりしました。

こうした機運に乗り、児童数が二五人にまで減った〇二年六月、青河小学校の存続をめざすという熱い想いを持つ私を含めた四〇〜七〇歳代の九人が集まり、学校存続のための活動を開始することを決意しました。自分たちが何もしなければ、子どもの数は減り続けてしまう。黙って見ているわけにはいかないと――。

私たち九人は、一人一〇万円ずつ出資し会社を設立しました。青河にちなんで名は「有限会



profile

岩崎 積 いわさき つもる

1951年広島県三次市生まれ。三次市青河町にて総合建設業に携わる。94年三次市立青河小学校PTA会長・同建設委員長に就任し、96年の小学校校舎の改築の中心となる。2002年有限会社ブルーリバーを設立。賃貸定住住宅の建設と移住者の招致に尽力する。08年より青河自治振興会会長を務める。

青河自治振興会

2004年、旧三次市を中心に8市町村が新設合併したのを機に青河町で設立された住民自治組織。7つの部会からなり、小学校の児童数の確保や伝統文化の保全、高齢者の暮らしを守る仕組み作りなどさまざまな活動に取り組む。15年「平成27年度豊かなむらづくり全国表彰 農林水産大臣賞」「あしたのまち・くらしづくり活動賞 主催者賞」など多数受賞。

社ブルーリバー」です。新しく家を建て、地域外からの子どもがいる若者家族など移住者呼び込む定住促進事業がスタートしました。私たちは次のことを計画しました。

▽子どものいる若者家族を呼び込むため、町内で一番良い場所に誰もが住みたくなる若者住宅を建設する。▽若者住宅は当面空き家のリフォームも含めて一〇棟をめざす。▽出資社員は無報酬で協力する。

誰もが住みたくなる住宅

住む人に喜んでもらえるよう「誰もが住みたくなる家」をめざし、国道沿いの地域で一番交通の便の良い場所に、子どもがいてもゆつたり暮らせる三D Kの住宅二棟を建設しました。

行政の協力を得て団地開発などで大勢を呼び込むよりも、自分たちで身の丈に合った誘致をすべきだと考えました。人口四〇〇人の青河町では、住民一人一人の顔を覚えて、生活や自治会の活動を共にするのが適正な自治だと思ったからです。

建設のための資金の不足分は出資した九人全員の連帯保証で地元の信用金庫とJ Aから借り入れました。経費を節約するため、建設用地の手配や造成、片付けは、建設業に携わっていた私が中心になり、専門業者に頼まなくてはならないもの以外は出資者九人全員で行いました。入居に当たっては、原則として以下を条件としていました。「小学生以下の子どものがいること」「地域行事へ極力積極的に参加すること」「子どもは青

河小学校に入学させること」です。

当時、こうした若者住宅へのニーズは高いものがあり、早速、広島市と神奈川県横浜市から家族二組が入居し、子どもが五人も増えました。

三棟目は四D Kのオール電化住宅を建設しました。コストダウンのために利用したのが、数が増えてきていた空き家です。若者住宅としてリフォームすれば、美観上や安全防犯上の問題への対策にもなります。そこでブルーリバーで空き家の所有者に意向調査をし、不要物や修繕の費用を肩代わりする、個人ではなくブルーリバーが借り上げるなど個別の対応策を取り、これまでに五棟をリフォームしました。建設中から子育て世帯からの申し込みが殺到し、滑り出しは順調でした。ただ、低家賃の賃貸住宅事業は



上:「青河放課後児童クラブ」の様子

下:ワゴン車のルートは病院や市役所など、その日の要望に沿って決める

入居状況で経営が左右されます。また、経年劣化で修繕が必要になったり、家賃の値下げも考えなければなりません。そこで一三年五月、ブルーリーの所有地に太陽光発電施設（出力約四九キロワット）を設置しました。年間約一八〇万円の売買収益を借入金返済や値下げした家賃の原資に充てています。

私たちの手掛けた若者住宅で、これまでに三家族一三四人が暮らしました。近年は地元出身の小学生は一〇人前後に減りましたが、転入生のおかげで小学校には約二〇人の全校児童があり、今年度は四学級、教職員七人で運営しています。

山道を一人で通学する子どもが多いため、親たちが安心して仕事ができるよう、〇七年には小学校のすぐ隣にあるコミュニティセンター内に「青河放課後児童クラブ」を自治振興会で開所しました。学校の授業では、地域住民が先生となった「稲の農業体験」や「しめ縄作り」などがあり、また、小学校の運動会は町民と合同で行い、子どもたちと交流を図っています。こうした取り組みの結果、青河小学校は存続しています。

過疎地域だからこそ学校は必要です。学校というものは、長い年月をその地域と共に歩んできています。人数が足りないから、議会で承認されたからと、行政の効率化のために統廃合を受け入れているのが現状ですが、過疎地域から学校を取り上げると高齢者だけの限界集落となり何も残らないと思います。行政の基準がどうあると、子どもたちを地域に住まわせ、地域で学ばせ、地域で育て、地域の将来を担ってくれるこ

とを願っています。

小学校は心のよりどころ

一九五四年、双三郡酒河村字青河村は三次市に合併しました。村内には産業組合（現在の農協）と分教場（一〜三年生まで）しかありませんでした。合併当時は一六五戸六五〇人だったそうです。リーダーたちは、青河に学校を残そうと考えました。合併により市内のあちこちで廃校となった校舎を青河へ移築する運動をし、五六年に実現させました。学校名は三次市立酒河小学校青河分校です。当時の児童数は一三〇人。町民は全戸、PTA会員となり自分たちの学校として位置づけました。青河の住民が手弁当でグラウンドを整備したと聞いています。その後、六三年には独立校となり現在の三次市立青河小学校となりました。学校給食が始まったのはこの年からです。それまでは冬季だけです。地域住民が子どものいる、いないに関係なく順番に当番を組み学校に味噌汁を作りに行っていました。五七年、私は地域につくり上げてもらったこの小学校分校に入学しました。二階の教室から毎日地域の人々が校庭の整備に汗を流されている姿を見て育ちました。その姿は、目の奥に焼き付き今も私の宝物です。先人が残してくれた青河小学校は、私たち住民の心のよりどころです。地域のために、次代のために、決してなくしてはならない宝物だと思っています。

子どもの笑顔にやる気スイッチ

さて、青河小学校へ向かう子どもたちの姿、笑

い声は、大人たちの心にスイッチを入れました。地域が活気づくという良い循環が生まれてきました。ブルーリーバーで利用されていなかった約一畝の土地を整備し芝生を張った広場を造り、廃屋は手打ちそばなどを提供する農家レストランにリフォームしました。

二〇一六年夏にオープンした農家レストラン「こいこい屋」は、住民六七人が出資して設立した「合同会社あおが」が運営に当たっています。土、日のみの営業ですが、年間四〇〇〇人が訪れる人気店となっています。

また、自治振興会の暮らしサポート事業も軌道に乗り始めました。すべての住民が平等に四五〇〇円を負担し、さまざまなサポートを受けられる仕組みです。例えば「輸送サポート」。交通弱者の町で、国道は通っていますがバスの便数が少なく、ほとんどの家がバス停まで遠いのが現状です。そこで、八人乗りのワゴン車一台を地域住民全ての共有車両として登録しました。運転手は六〇歳代の住民がボランティアで務めてくれています。

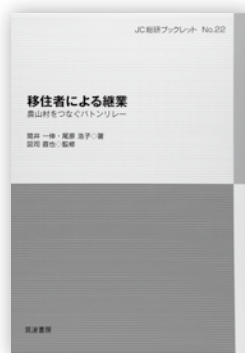
過疎化、少子・高齢化が進み、農業の後継者問題や空き家問題など課題を挙げれば枚挙にいとまがありません。しかし嘆くことなく地域の活性化に向けた取り組みを町民一丸となって進めていきます。

何より大切だと感じているのは「地域全体が一つの家族として協力し支える仕組みづくり」が、「地域に宝物を根付かせる」ことです。住民の合言葉は「こころ あたたまる ふるさと あおが」です！

『移住者による継業』

農山村をつなぐバトンリレー

筒井一伸・尾原浩子 著 関司直也 監修



(筑波書房・750円 税抜)

継業は地域再生になるか

青木 宏高

(NPO法人「良い食材を伝える会」理事)

『地方消滅』という本を記憶しているだろうか。五年ほど前、この本に世間が驚愕した。著者は岩手県知事の後、安倍内閣の総務大臣も務めた増田寛也さん。減少を続ける若年女性の人口予測から導いたデータが基になっていた。一方で東京一極集中のゆがんだ人口構造にも警告を発して話題を呼ぶ。

本書「継業」の背景には地方の人口減少、高齢化の実態がある。ちなみに農林業を主要な「なりわい」とする農山村の人口を二〇一五年農業センサスに見ると、農業就業人口は二〇九万人で、五年前の前回調査から五十一万人余りが減り、およそ二割の減少率は戦後の就業人口統計の中でも稀有である。若者の就業人口が伸び悩み、農家の後継者不足が読み取れる。

地方再生のために移住者を増やすのは分かるが、「継業」は地方再生の方策につながるのか。継業とは、これまで世襲で受け継がれてきた「なりわい」が地元住民から移住者など第三者に渡されるバトンリレーである。

「これまで移住者の生計を考える際には、起業や就業に注目しがちでした。しかし、継業は初期投資を抑えられ、顧客を引き継ぐことなどたくさんさんのメリットがあります。移住者の新しい価値観でリノベーションされて使いやすくなるなどのメリットがあります。」

さらに、地域にとっても長年必要としていた店舗が継続されるだけでなく、地域のなりわいが残り続けることは、その地域の活力にも直結する。そう本書は記述する。

これはなかなか難しい問題であるが、本書第Ⅱ章の『現場から見る「継業」の形』には、マッチングがうまく成功した事例が紹介されている。

例えば、「キャンプ村の経営を引き継いだ」地域の名物豆腐屋による多角経営「田舎食堂のアイデア経営」など、地域住民がバトンリレーで支えてきた地域のなりわいが見えてよく分かる。地域住民に長年親しまれてきた小売店や民宿など小規模零細な店舗の廃業が深刻になっている他方で、農山村を志向する田園回帰の風が吹き続け、増える移住者との継業が全国的に少しずつ広がる。

本書はブックレットで、論点が整理され読みやすい。地方を考える良い参考になる。



読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2019年9月1日～9月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 令和元年度 強い農業・担い手づくり総合支援		創造書房	7,650円
2 農政改革 行政官の仕事と責任	奥原 正明／著	日本経済新聞出版社	1,600円
3 IWC脱退と国際交渉	森下 丈二／著	成山堂書店	3,800円
4 森林未来会議 森を活かす仕組みをつくる	熊崎 実、速水 亨、石崎 涼子／編著	築地書館	2,400円
5 誰も農業を知らない:プロ農家だからわかる日本農業の未来	有坪 民雄／著	原書房	1,800円
6 絶望の林業	田中 淳夫／著	新泉社	2,200円
7 OECD政策レビュー・日本農業のイノベーション	OECD／編著	大成出版社	3,000円
8 分かち合う農業CSA 日欧米の取り組みから	波野 豪、唐崎 卓也／編著	創森社	2,200円
9 日本を救う未来の農業——イスラエルに学ぶICT農法	竹下 正哲／著	筑摩書房	840円
10 アグリカルチャー4.0の時代 農村DX革命	三輪 泰史、井熊 均、木通 秀樹／共著	日刊工業新聞社	2,300円

認定農業者の皆さまへ

自主性と創意工夫を活かした 経営改善を応援します

経営改善に取り組む認定農業者の皆さまのさまざまなニーズにお応えします。

■スーパーL資金（農業経営基盤強化資金）

ご利用いただける方		認定農業者（農業経営改善計画を作成して市町村長の認定を受けた個人・法人） ※なお、個人の場合、簿記記帳を行っていること、または今後簿記記帳を行うことが条件となります。
資金の使いみち		農業経営改善計画の達成に必要な次の資金 ただし、経営改善資金計画を作成し、市町村を事務局とする特別融資制度推進会議の認定を受けた事業に限ります。
	農地など	取得のほか、改良・造成も対象となります。
	施設・機械	農産物の処理加工施設、店舗などの流通販売施設も対象となります。
	果樹・家畜など	購入費、新植・改植費用のほか、育成費も対象となります。
	その他の経営費	規模拡大や設備投資などに伴って必要となる原材料費、人件費などが対象となります。
	経営の安定化	負債の整理（制度資金は除く）などが対象となります。
	法人への出資金	個人が法人に参加するために必要な出資金などの支払いが対象となります。
ご融資条件	融 資 限 度 額	【個人】 3億円（特認6億円） 【法人】 10億円（特認20億円【一定の場合30億円】）
	ご 返 済 期	25年以内（うち据置期間10年以内）
	利 率（年）	期間により異なる利率が適用されます。詳しくはお問い合わせください。
	担 保 ・ 保 証 人	ご相談の上、決めさせていただきます。
ご留意いただきたい事項		1. 審査の結果により、ご希望に沿えない場合がございます。 2. 上記以外にも資金をご利用いただくための要件などがございます。 詳しくは、事業資金相談ダイヤル(0120-154-505)または最寄りの日本政策金融公庫支店（農林水産事業）までお問い合わせください。

セミナー 新規就農者に情報交換や ネットワーク作りの場を提供

「新規就農者応援セミナー」を開催。JAはが野青壮年部の君嶋貴宏、JAかみつが青年部の渡邊義正の両氏が「先輩農家から学ぶ！農業のいろは」というテーマで講演しました。

大切なこととして、「作業日誌を欠かさず続けて振り返り、次に活かすこと」「君嶋氏」、「明確な目標を設定し、何ができて何ができていないかを知ること」「渡邊氏」を挙げ、共通して「仲間や周囲と支え合うことが大事」と力説しました。

七月二十四日、於：宇都宮市、共催：農林中央金庫宇都宮支店、参加者：就農者など一二五人（宇都宮支店）



講演した両氏に質問の手が多く挙がりました

アドバイザー 農業者から学ぶ アドバイザーが担うべき役割

山梨県農業経営アドバイザー連絡協議会を開催。神奈川県横須賀市で有機農業を営むSHO Farmの仲野翔氏が登壇。「多くの農業者は日々の農作業に追われ経営を振り返る時間の確保が難しい。そこで会計ソフトの紹介や補助金の案内など、経営管理や資金繰りに関するアドバイザーが役立つ」と呼び掛けました。参加したアドバイザーからは「農業者のニーズを直接聞くことができ参考になった」などの感想が聞かれました。

八月二日、於：甲府市、参加者：県内の農業経営アドバイザーら一七人（甲府支店）



自らも農業経営アドバイザーの資格を持つ仲野氏

セミナー 新規就農者向け講習会で 経営の課題や悩みを共有

愛知県主催の「新農業経営者セミナー」が、今年もスタート。日本公庫共催のこのセミナーでは、新規就農者が全五回の講習で農業の基礎知識の習得を図ります。

第一回目の今回は「我が家の営農目標と課題把握」と題し、新規就農者同士で経営に対する不安や悩みを共有し、解決方法を話し合いました。公庫は農業制度資金について説明しました。次回以降は「新規就農し公庫資金を利用した方」の講話なども予定されています。

八月二十九日、於：豊橋市、主催：愛知県、参加者：県内新規就農者一〇人（名古屋支店）



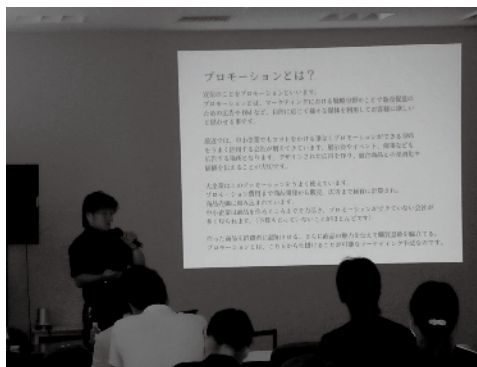
公庫の融資に関する質問も出ました

セミナー デザインから考える 売れる農産加工品の作り方

農産加工品のパッケージデザインを手掛ける株式会社インプレスの綿貫裕崇氏が「売れる6次産業商品のつくり方」マーケティングデザイン」をテーマに講演。

「パッケージのクオリティーの低さは商品の品質に不安を感じさせる」「五〇〇円の商品をデザインする力をもって一〇〇〇円で売る」など、デザインが消費者に与える影響や効果を強調。参加者からは「セミナーを受け、販売戦略を検討したい」などの声が寄せられました。

九月四日、於：大分市、参加者：県内農業経営者ら二五人（大分支店）



マーケティングデザインについて説く綿貫氏

災害のお見舞い

「令和元年台風第19号」により被害を受けられた皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。

日本公庫農林水産事業では、本災害により被害を受けられた農林漁業者などの皆さまのご融資やご返済に関するご相談に、政策金融機関として迅速、かつ、きめ細やかな対応をおこなってまいります。

◆二〇一〇年に農事組合法人を立ち上げ、一〇年がたちます。

もともとは水田農業を中心に、麦や大豆を栽培してきましたが、三年前からは機能性の高い黒大豆の加工にも乗り出しました。アントシアニンの含有率が高い「クロダマル」という品種の黒大豆を加工しています。黒豆茶やコロッケ、お弁当などが主力商品です。

また、七〇平方メートルの格納庫の屋根を活用し、三二キロワットの太陽光発電の設備も取り付け、収益を上げています。

七〇歳を超え、農業の六次産業化で利益を出すのは、そうたやすいことではないと感じています。そんな私が目指すのは、「もうからなく

ても損をしない農業」です。「楽しく元気に」をモットーに、これからも進めていきたいと考えています。

(彦根市 茶木 源重郎)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただくことがあります。掲載者には、薄謝を呈呈します。

【郵送およびFAX先】

〒〇〇〇〇〇〇四

東京都千代田区大手町一〇九四

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫

農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 〇三三三三三〇一三五〇

編集後記

④ 日本代表の活躍により大いに盛り上がったラグビーワールドカップ。この国際スポーツイベントには約四〇万人もの訪日外国人が見込まれているようです。インバウンドによる直接的な経済効果はもちろんのこと、日本各地の食への関心が高まり、農林水産物・食品輸出につながるという間接的な経済効果にも期待しています。

(西山)

④ 「神様このレースの服どこから編み始めるのですか」。これはファームランド牧のメロンの化粧箱に書かれている言葉で、お客さまからの絵手紙から引用したものだそうです。メロン一個一個を自分の娘のように育てる牧さんにぴったりだと感じました。さて、皆さんはレースがどこから編み始められているかご存知でしょうか？

(山本)

④ 「変革は人にあり」は「満足度日本一」の観光農園を目指す矢萩さん。毎日採れたての果物を使って作るというパフェをホームページで拝見。おしゃれなパフェには、果物がこれでもかッと載っていて目を見張るほど。パフェの概念が覆ったと言っても過言ではありません。いつか、矢萩さん自慢のサクランボの木を見ながら楽しみたいです。

(城間)

④ 知人からシャインマスカットが届き、宝石のような美しさとぐわしい果汁に感激。農園の方々の手間と栽培技術に家族で思いをはせました。「多論百出」で野口さんが語る農業の価値。品質にお金を掛けるのは野菜でも家電などでも一緒のはずですが、安い野菜に手が出る自分がいいます。なかなか答えの出ない問題です。

(竹中)

AFCフォーラム Forum

■編集

前田 美幸 西山 大也 高雄 和彦
山本 晶子 城間 綾子 竹中 夕美
鈴木 晃子

■編集協力

青木 宏高 村田 泰夫

■発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>

■印刷 凸版印刷株式会社

■販売

株式会社日本食糧新聞社
〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4
ヤブ原ビル
Tel. 03(3537)1311
Fax. 03(3537)1071
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

■定価 514円(税込)

④ ご意見、ご提案をお待ちしております。

④ 巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり
農と食を
つなぎます。

第13回 アグリフードEXPO大阪 2020

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

2月19日(水)/20日(木)

10:00~17:00 10:00~16:00

主催

日本政策金融公庫

会場

ATC アジア太平洋トレードセンター



「農水産物食品輸出」シリーズ／後篇

追跡、チャレンジ農業者



『夕暮れ時の田舎の田んぼ』中山 夏椰人 東京都小平市立小平第六小学校

■AFCフォーラム 令和元年11月1日発行(毎月1回1日発行)第67巻8号(831号)
■発行／(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■販売／株式会社日本食糧新聞社 〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4 〒7原ビル Tel.03(3537)1311 ■定価514円 本体価格468円



日本政策金融公庫 農林水産事業本部

<https://www.jfc.go.jp/>